

武者小路實篤選集

第九卷

武者小路実篤選集 第九卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 9 卷

昭和40年 3月23日 初版発行

複 印

定価 六八〇円

著 者 武者 小路 実 篤

発 行 者 真 鍋 謙 二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 石 津 製 本 所

東京都新宿区納戸町五番地

発 行 所 図 書 出 版 株 式 青 銅 社

電 話 二六〇局 八七六五番
振替 東京 三四、八九二番

printed in Japan ©

序

僕ももう八十になった、今までにいろいろのものを書いて来た、僕は本当の事を書きたいと思つて書いて来た、僕の望みは、すべての人が幸福に生きる事である。同時に死なねばならない人間が、この世に生きて、生き甲斐を感じるためには、自分を愛するだけでは死が最後になり、人生には救いがないという事実である。個人は個人のために生きてゐるのではない。自分のこの世でしてゆかなければならない仕事をするために生きて始めて生き甲斐があり、死が最後でない、何ものかに奉仕した生活になり得るのだと思つてゐる。

だから僕は現実だけに執着しては救われない、自分の理想を目指して一步一步進んでゆくところに希望が生まれるのだと思つてゐる。

しかしこれは考えただけで済まるものではない、本を読めばそれで人生はわかるものではない、人間の知識だけで人生の妙味は味わえるものではない、読書の面白味は、自分の実感の深さに照して見て始めてわかるので、その思いあたる事実が自分にあつて始めて理解出来るのだ。自分に思い当たる事実は理窟ではないのだ。

批評的に本を読むのも大事ではあるが、一番大事なのは、自分の人生を深め、自分の生活をよく正しく、深くする事だ、大事なのは読書ではなく、自分の一生だ、自分の一生を出来るだけ有意味に、美しく、まちがいなく、よりよく生かすために読書を役立てることだ。

よく僕が言うが僕達が食事をするのは滋養分をとる事だ、勿論食事はうまいに越した事は無いが、大事なのは健康な肉体をつくる事だ。読者は自分の精神を健全に発達させるためだ。精神的滋養分を出来るだけ多くとって、不要なものにひっかからない事だ。それは愛読しているうちに、自ずと頭脳がとってくれると思う。僕はなるべく読者に役に立ちたい事を書いたら書きたいと思うが、しかし役にたつかたないかは、読む人による。僕は誰に読まれるか知らずに書いている。どこかで誰かが読んで、それがその人の一生によき結果が生まれてくれれば、作者は書き甲斐があったと言うものである。しかしまいた種がどこで何時芽を出すか知らないところが作者の運命であり、それを信じていられる作家はいろいろの意味で目出たいと言っているように思う。

昭和四十年三月四日

武者小路実篤

武者小路実篤選集・第九卷

目次

若き日の思索（白樺時代の感想）

道徳論 259

徒然草私感 387

タウリスのイフイゲーニエ 485

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

若き日の思索（白樺時代の感想）

一九〇八年

クリンゲルの「貧窮」を見て

一

今の世の中には、肉体の糧のために労働しなければならない人が沢山いる。彼等は労働が神聖なるが故に労働するのではない。労働は人間のなすべき本務なりと信ずるが故に労働するのではない。労働が楽しきが故に労働するのではない。労働がしたいから労働するのではない。

労働をしなければ食うことが出来ないから労働するのである。労働しなければ家に住めないから労働するのである。労働しなければ酒が飲めないから労働するのである。彼等の労働は目的ではなく手段である。しかも高き理想に進まんとする手段ではなく、食客になりたいための手段である。労働は神聖であるかも知れない、しかし今の多くの労働者の労働は神聖ではない。されば自分は労働者を尊敬しない、そうして憐れむ、そうして今の社会を不公平と思う。

もし労働の神聖を知って労働するものがあれば吾人はその人を尊敬する、しかし憐れむことは出来ない。少な

くも吾人にはかかる人を憐れみ得る資格がない。自分は世に労働の神聖をとなえて労働者を憐れむ人のあることを不思議に思う。自分の真理のためにあらゆる艱難に耐える人を見て崇拜しないではいられないが憐れむことは出来ない。

自分は今の労働者を尊敬することは出来ない、それと同時に憐れまないではいられない。

二

ミレーの絵の写真版を見ても、ミュニエーの彫刻の写真版を見ても、自分は描かれたる、あるいはつくられたる労働者に尊敬の念を払わないではいられない。これ等の労働者の顔も無智を表彰している。過度の労働のつかれを顕わしている。しかしこれを見る時吾人は憐れみの情をおこすことは出来ない。尊厳なる崇高なる人間を見るような感じがする。

あたかも人類のために自然と苦闘しつつある巨人を見るような気がする。なまじっかのヘラクレスの絵を見るよりも。耶蘇の絵を見るよりも。ダビデやサムソンの絵を見るよりも崇高の念にうたれる。

何故であろうか。思うにミレーやミュニエーの目に映じたる労働者はクリスチャンの目に映じたる耶蘇の如く、貴く高きものとして映じたのであろう。かくてミレーやミュニエーの作は写真なるにも閑せず、翫賞者をして真から離れたる感をおこさせるのであろう。一万の労働者のうちにミレーやミュニエーによってつくられたような崇高なる労働者が一人でもあるだろうか。自分には不幸にしてあると言ひ得る力はない。もとより自分とて炎熱やくが如き日光をあびて畑をたがやす銅色の人を見る時崇高の念をおこさないではいられない。しかしこれは第三者の見る労働者であって労働者自身の見る自己とはちがう。人は多く自覚なき聖人である如く、労働者は

自覚なき勇士であるかもしれない。しかし労働者自身の見たる自己はしかく勇ましきものではなく誠にあわれなる一個の器械である。器械の器械である。自ら進んで主義のために労働するが如き考えは彼等の頭には微塵もないと思う。彼等は「働け然らざれば餓えん」という声に驚かされて働いているのである。実際餓えを恐れて働いているのである。そうして精神と肉体を共につからしているのである。

彼等は實際肉体の糧のために労働しているのである。過度に労働しているのである。かくて彼の頭は永遠に餓え、彼の自由は永遠に奪われてしまった。かくて男は個性の尊敬を失い、女は女性の優美を失った。ここにおいて現代文明は労働者を如何にして救うべきかと自問して自答に苦しんでいる。

三

自分はまた学に浅い、見聞する所は至って狭い。かかる憐れなる労働者を描ける文学の沢山あることは知っているが、絵画ではただ一枚きり知らない、その一枚はクリンゲルの「貧窮」である。（これをかいたあとで他に沢山あるのを知った。）

「貧窮」はクリンゲルのエッチング集の第十三集「死に題す」の第二集の第六番目の画である。労働者は今列を組んで休んでいる。大きな板を背中に負わされている。それは軛くみぎだ、皆荷車を曳いているのだ、腰は鎖をもつてつながれている。いずれも疲れきっている。もう何ごとも考える気力はない。もう何等の理想もない。ただ少しでも休んでいたいようだ。もう反抗する力もなければ不平をいう力もないようだ。ほんとにがっかりしている。

前列は三人で、共同して大きな板の軛を負っている。向かって左の端は老人だ、右の手で頭をおさえて下を向いている。今食ったばかりの弁当が倒れているが、おこすだけの元気がない。真中は赤ん坊を抱いて乳をのませ

ている女だ、しかしその容貌にどことして女らしいところはない。母らしいところはない。彼女は母の愛をもつて児に乳を飲ませるのでなく、ただ情性でのませているのだ。右の端にいるのは若者だ。しかし青年の活気はどこにも見出すことが出来ない。

その他後列にも婆さんがいる。爺さんがいる。青年がいる。しかしどれもこれも人間らしいところが少しもない。温き血の通っていそうな人は一人もない。

この行列のわきに鎖につながれていない四人の人がいる。一人は画の右のはじめに立って左の腕を高くあげて、右の手に鞭を持って、今にでも不平をもらす者があれば鞭撻を与えようとまぢかまえている。

四人のうち一番右にいるのは女だ、一人の労働者なる婆さんに食を与えている。しかしその顔に何等の同情らしいものを認めることは出来ない。

あと二人は車にのっている馭者と、馭者と話している猶太人だ。これも人間らしくない人間だ。

皆が曳いている車の上には建築に使う、古代風の飾りがのっている。立派な大理石でそれに皇帝の肖像がついている。その上に鷲が羽をひろげている。四つの上の角には牡羊の首がついている。この飾りの傍に青葉を風に動かせながら巨木が二三本直立している。

また遙か後の地平線上に奴隷の群れが何か右から左へと坂路をひき上げて進んでいる。一人の人が鞭をあげて逐っている。

天は陰雲にとざされている。

四

クリンゲルはここにおいてトルストイのいわゆる現代の奴隷なる労働者を描いた。ここにミレーの画、ミュニエーの彫刻において求めることの出来ない感じを吾人に起こさせる。吾人はこの画を見て労働者の崇高なる天職を感じることは出来ない。しかし吾人はこの画を見て現今の労働問題の起きる原因を知ることが出来る。

ここに顕わされたる労働者は、個性ある人間ではない。甲をもって乙にかえることの出来ないという人間ではない。この画を見る時吾人は乗り合い馬車の馬を連想しないではない。

ここに描かれたる労働者には希望もなければ金もなく自由もない。もう意思もなければ感情もない。智は勿論ない。ただ安逸を望んでいる。彼等は疲れているのだ。彼等はただ苦痛と死を恐れて無意識的に労働しているのだ。

五

ミレーやミュニエーによって紹介されたる労働者に比してクリンゲルのこの画によって紹介されたる労働者は如何にも憐れむべき人間である。吾は前者を崇拜するも後者を崇拜することは出来ない。後者を憐れむと共に前者を憐れむことは出来ない。

しかし何れが現代の労働者の真をとらえ来たりしか。

予は前者ならんことを希望する、しかし事實はどうであらう。

クリンゲルは現代ドイツにおける最大なる理想画家である。且つ彼はミレーの如き百姓の子でもなく、またミ

ユニエーの如く、軋夫を日常觀察せる人でもない。彼は富める一商人の息子である。餓えは彼の知るところではない。さればクリンゲルはミレーやユニエーに比して労働者の真を捕うることは難しい位置にいる。しかし自分はクリンゲルがかの「貧窮」において描ける労働者の方が真に近いと信ずる。

カイザルと旧思想と餓えの奴隷となつて軋を一生負わなければならぬ労働者は決して人類のために戦う勇士ではない。弱者である。吾人の理想とすべき人間ではなく、吾人の救うべく骨折らねばならぬ人間である。吾人は真の労働の神聖となさるべきであるが、今の労働者を讃美すべき理由を見出さない。

自分はかかる奴隷の地上より無くなることを願う。

六

思うに自らの理想のために苦しむ時にのみ苦に価値がある。して理想の高きに從つてその苦の価値はますものである。苦そのものに価値はないのである。価値なき苦に苦しむものは憐れな人である。今の労働者の苦もまた多くはこの価値なき苦である。もし労働者にして労働をもつて自分の天職と信じて苦しむならばその苦は価値ある苦である。価値ある苦に苦しむものは尊敬すべき人である。

ミレーまたはユニエーによつて自分が知りし労働者は価値ある苦に苦しむ労働者である。自発的努力が疲れたる顔にうかがわれる。クリンゲルによつて自分が知りし労働者は価値なき苦に苦しむ労働者である。死と苦痛を恐れていやいや働いていることが顔にあらわれている。自分はミレーあるいはユニエーの描ける労働者をもつて理想の労働者と思う。してクリンゲルの描ける労働者を現実の労働者と思う。

自己の君主であり、自己のみの臣下である人のみ、理想の労働者たり得るのである。現代の労働者は果たして